大阪・関西万博と地元パビリオン

写真は読売新聞 3 月 24 日朝刊「万博特集」。大阪・関西万博の概要を写真付きで解説しているので、抜粋して紹介する。

2025 年大阪・関西万博は、新型コロナウイルスを乗り越えた先の「新時代の国家プロジェクト」として位置づけられている。万博の運営組織「日本国際博覧会協会」（万博協会）が昨年 12 月に公表した基本計画では、施設配置や展示方針が示された。四方を海に囲まれた会場（155 ㌶）には、1 周約 2 ㌔の環状の大屋根（幅 30 ㍍、高さ 12 ㍍）が、部分的に海にせり出した形で整備される。大屋根の上を歩くことが可能で、来場者は瀬戸内海を一望できる。会場は、大屋根や各国・企業のパビリオンが集積する「パビリオンワールド」、水上イベントが実施される「ウォーターワールド」、トークライブやフォーラムを開く屋外イベント広場がある「グリーンワールド」の 3 エリアに分かれる。会場の中央付近は「静けさの森」として、来場者が休憩できる緑地となる。「未来社会のショーケース」に見立てた場内では、脱炭素や空飛ぶクルマなど最先端技術を導入。仮想現実（VR）技術を駆使した「バーチャル万博」では、自分の分身となるキャラクター「アバター」を使い、オンライン上で、パビリオンを擬似体験できるようにする。会場建設費（最大 1850 億円）の内訳は、パビリオンや大屋根の建設に 1180 億円、電力、下水、通信などの基盤整備に 670 億円で、国、大阪府・大阪市、経済界が 3 分の 1 ずつ負担する。運営費は 809 億円を見込む。パビリオン建設は 23 年度に始まる。会場への交通手段は、シャトルバスや自動車のほか、大阪メトロ中央線を延伸して、夢洲駅（仮称）を建設する方向で準備を進めている。

特集では、旗振り役をつとめる関経連の松本正義会長や地元パビリオンの企画を取り仕切る森下竜一・大阪大寄付講座教授らに聞いている。森下氏インタビューから。大阪府と大阪市が出展する地元パビリオンは「生まれ変わる」を意味する「REBORN」をテーマにしている。来場すると「10 歳若返る」ような施設を目指している。例えばテーマパークにあるアトラクションのようなイメージで、乗り物に搭乗し、人体の不思議や生命科学の奥深さを学んでもらう。その中では、様々な計測技術を駆使し、その人の脳や血管、肌の「年齢」を測定する。

森下氏は大阪パビリオン総合プロデューサーをつとめる。10 月 15 日にレポートしたように、森下氏は大阪府が設置した「2025 年万博基本構想検討会議」の第 1 回整備等部会（2016 年 7 月 22 日）で、夢洲を万博候補地とするような発言をしている。また、アンジェス創業者でもあり、大阪府・市、吉村知事・松井市長らと繋がりがあるようだ。

（2021 年 12 月 20 日）